

## 美術の窓 (166)

## 広重版画の初摺・後摺

大和文華館館長 浅野秀剛

8月3日に、私が兼任している大阪のあべのハルカス美術館の開館10周年記念展である「広重一摺の極一」の開催が発表された。会期は2024年7月6日(土)～9月1日(日)。歌川広重の総合的な展覧会で、あべのハルカスだけの単館開催、主担当は私である。久しぶりに学芸員として仕事をするわけで、正直、妙に張り切っている。誤解を恐れずに言えば、私にとっては、館長の仕事より学芸員の仕事の方が面白い。なかでも特別展の実施は新たなものを創り上げる喜びに満ちている。展示作品は336点あり、その全部に解説を付けることにしているので、今はそれに追われている。

副題は「摺の極(すりのきわみ)」となった。初摺の良品をできるだけ集めて展示するという意味の副題であるが、白状すると100%初摺にするのは極めて難しく、今回は達成されていない。そこで試みに、広重の作品として最も著名な保永堂版「東海道五拾三次」のいくつかの作品の初摺と後摺について考えてみたい。

保永堂版「東海道」の研究は、鈴木重三・木村八重子・大久保純一『保永堂版 広重 東海道五拾三次』(岩波書店、2004年)が最新であり、私を含め、研究者はそれを乗り越えようともがいているというのが現状である。岩波版では、保永堂版「東海道」の55図について、鈴木先生たちが最も早いと判断した伝品をカラーで大きく掲載している。その所蔵は各図バラバラで、例えば、「日本橋」は東京国立博物館蔵、次の「品川」は山種美術館、有名な「蒲原」はホノルル美

術館、「庄野」は山種美術館といっただぐあいである。その意味するところは、世の中に初摺だけの完全なセットは存在しないということになる。保永堂版「東海道五拾三次」は完成後、表紙などを付けてセットで売り出されたが、それは初摺のセットではない。保永堂版「東海道五拾三次」は、鈴木説によれば(以下、特別に記載しない場合は鈴木説を採る)、天保5年(1834)春頃から販売を開始し、天保7年春頃に完成した。初摺の完全セットを作るには、販売されるたびに新品を保存し55枚揃える必要があるが、そういうものは伝存しない。

具体的に見てみよう。

最初の「日本橋」は、空の左右に紫色の雲がほかし下げで表わされているものが最も早い。岩波版に掲載されているのは東京国立博物館蔵品であり、同種のものとして、私は大英博物館蔵品を知っているだけの稀観品である。その紫が藍になるのが次の段階であるが、それも、私は江戸東京博物館とボストン美術館蔵品など数点を知っているだけ。次の段階で、左右の雲のうち右端の雲が除去される。それがおそらく、版元と広重による最終形であり、今回展示されるのはその段階の摺のものである。その形でも、雲にほかしがかけられているものとそうでないのがある。

次は、「蒲原」。これは評価の高い作品だけに、長期に亘って摺の前後が研究されてきた。最も早いものは、瓢箪形白文朱印「夜之雪」が、背後の空の灰色地の上にかぶせて摺っているもので、黄合羽人物の膝頭と脛の一部に濃い残

し(「ケツ」という)のあるものである。これに該当するものは例外なく天から一文字ほかし(ほかし下げ)がかけられている(図1)。「夜之雪」の背後の灰色地を瓢箪形に彫り抜き、朱印を鮮明に見えるようにしたものが次の段階で、それには、ほかし下げのものと、空の下からほかし上げられているものがある(図2)。さらに、ケツを浚って最終的に落ち着く。ケツを浚っているものほとんどは、ほかし上げの作品である。ただし、ほかし下げとほかし上げは同じ版木を使い、どちらにするかは摺の段階で決められるので、それだけで摺の前後を決めることは厳密にはできない。しかし、灰色地を彫り抜いたり、ケツを浚う行為は、版自体に手を入れることになるので、元の状態に戻すことはできない。つまり、灰色地を彫り抜いていない、ケツを浚っていない版画は、確実に早い摺ということになる。それら以外にもいくつか摺の違いは指摘されているが、煩雑になるのでこれ以上は言及しない。今回展示されるのは、最も早い段階のものである。灰色地を彫り抜き、ケツを浚ったほかし上げ作品が、版元と広重が考えた最終形と思われるので、それを展示するというのも一つの見識であるが、それだと後摺を展示していると思われるのを恐れたのである。

「蒲原」と比肩されるのが「庄野」。こちらは「蒲原」と違い、版木を改変するという事は行われていない。だから、早い摺かどうかは、

版木の磨減ぐあいを目視で確かめることになり、かなり厄介である。摺の違いで顕著なのは、濃淡二列に重ねられた竹林にほかしが施されているか(先端部が濃い目になっている)否かという点だけである。おそらく、初めはほかしを施さずに濃淡の墨の重なりだけで処理していたのであろう。早い摺と思われるものの多くがそうになっているからである。だが、ほかしをかけたらどうなるかということになり、そういうものも商品として売り始めた。そこからは好みの問題なので、二種制作して販売したのではないかと推定している。ほかしの有無は摺師だけで処理できるので、ほかしの有無だけで摺の前後を判断することはできない。

「庄野」とは別の意味で悩ましいのは「丸子(鞠子)」。これは、「丸子」の表記だけを「鞠子」と改めているのである。かなり早くに改めたと見え、「鞠子」であっても、シャープで趣のある仕上がりの作品も少なくない。だから「鞠子」でもいいのであるが、違いが明確なだけに「鞠子」を展示すると後摺を展示していると思われるので、「丸子」を展示することにした。

展覧会における初摺・後摺はなかなか悩ましいのである。

図1 歌川広重「東海道五拾三次之内 蒲原」ジョルジュ・レスコヴィッチ氏蔵

図2 歌川広重「東海道五拾三次之内 蒲原」千葉市美術館蔵、灰色地は彫り抜かれているが、ケツは浚われていない



図1



図2

季刊 美のたより No.224

令和5年9月29日

発行 大和文華館